

何となく雪がやわらかく感じられるようになって来ました。
雪の下では春への準備が始まっているかもしれません。
さあ出かけよう美術館へ、お待ちしております。

展覧会のお知らせ

常設展 小川原脩「自伝風な展覧会 - アジアの大地 - 」開催中

中国桂林、チベット、ラダック、そしてインドへの旅で出会った風物は、小川原が生まれ育った倶知安にかつてあったような情景と重なり、情感豊かな作品を次々に生み出しました。それぞれの土地で自然と一体となった人びとを描いた作品を展示しております。

企画展

「くっちゃんart2011」開催中 3月27日(日)まで

羊蹄山麓や後志圏域に住むアーティストたちの、多様な技法による多彩な作品を集めた展覧会です。19人の作家の油絵、水彩画、版画、日本画、陶、石彫、写真、そしてデジタルプリントによる3D作品などを展示しております。

「マイコレクション展」

美術館のコレクションや個人のコレクションを展示します。今年はどうな作品が登場するのでしょうか。3月30日(水)から開催します。

ミュージアム通信

小川原脩記念美術館

☎ 21-4141 FAX 21-4142

URL www.town.kutchan.hokkaido.jp/town/somoa/index.jsp

倶知安風土館

☎ 22-6631 FAX 22-6632

URL www.town.kutchan.hokkaido.jp/town/huudokan/huudokan.jsp

開館時間は9時～17時(入館は16時半)
3月の休館日 1,7,8,15,22,28,29日

お得なお知らせ

3月3日(水)から3月14日(月)まで、日ごろのご利用に感謝してすべての入館者に団体割引にてご提供させていただきます。今年も39@RT WEEK(サンキュアートウィーク)が始まります。

風土館から「木の曜日講座が開かれています」

今月も「百年の森ファンクラブ」が木曜日の午後7～9時に風土館で講座を開催しています。内容と講師は以下のとおりです。ぜひご参加ください。なお、開館は午後6時半で、入館料としてお一人100円がかかります。

3月3日「森ときのこと」西原羊一さん

(北海道キノコの会 会長)

3月10日「森と鳥」村井雅之さん

(ゆうふつ原野自然情報センター主宰)

3月17日「森とヒト」矢吹 全さん

(フォレストレック主宰)

3月24日「森の生きもの」丹羽真一さん

(さっぼろ自然調査館)

木田金次郎美術館 ☎ 0135-63-2221

秋から冬を迎える展覧会

「出会いから100年 木田金次郎と有島武郎」開催中
「第11回仲間たち展」

岩内高校美術部OB・OGたちの作品展

3月8日(火)～3月13日(日)

「きだび資料館」3月19日～4月3日

西村計雄記念美術館 ☎ 0135-72-2525

西村計雄の「水辺の旅」3月18日(金)から開催
蔵出し!「コレクター気分!」3月17日(木)から開催
第7回「つたえる・つたわる箱絵展」
3月19日～4月10日

荒井記念美術館 ☎ 0135-63-1111

現在冬の休館中

海と山と田園と - ミュージアムロード情報 -

倶知安博物誌

三月を迎えると、気持ち何となくふんわりとふくらむことが多い。周囲は白一色であつても、渡る風や陽の光に春が近いことを感じ取るからだろう。厚く積もった雪も解けて凍つてを繰り返すうちに、表面はザラメ状になる。こうなると、森の中に入るのに最適だ。雪上を歩くのが楽になるばかりか、冬の間には雪の中に残されたさまざまなものが姿を現わすからだ。

木の枝、コケの切れ端や木の実など、雪上のさまざまなものがある。長さは4センチほどで俵型。薄い茶色で、網目状に透けているので中身が見える。枝や葉の破片が付いていることもある。手で裂こうとしても無理なほどに強固で、中に暗褐色の物体を含むことも多い。その性状から、通称「透かし俵」と呼ばれる。一体、なんだろう。

正体はクスサンという大型のガの繭だ。クスサンの幼虫は、初夏に木々の枝先でマユを紡ぎ、その中でサナギになる。お盆頃に成虫が羽化するの、サナギの

すかしだわら

脱皮殻を中に残してマユは空となる。しかしとても頑丈なので、その後も長く残り、上に乗った雪の重みで地上に落下して我々に発見されるといふ筋書きである。子ども頃、テグスを自分でつくったものだった。毎年、クスサンの幼虫がクリの木に大発生するので、マユを紡ぐ直前の幼虫を捕らえて水を入れたバケツに放り込んで溺死させる。死んだ幼虫を引き裂くと、中に透明なゼリー状のものが詰まっている。マユの材料だ。指でつまんで引つ張ると長く伸びるので、準備しておいた板の上に伸ばして陰干しにし、乾いたら薄めた酢をくぐらせて完成だ。長く伸ばせば細いのが、短くすれば太いテグスができた。このような経験も、もはや昔話である。

